

## 大東急記念文庫蔵『月瀬紀行』についての一考察： 大隈言道『今橋集』との関連において

進藤，康子  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8945>

---

出版情報：語文研究. 93, pp.1-13, 2002-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 大東急記念文庫蔵『月瀬紀行』についての一考察

— 大隈言道『今橋集』との関連において —

進 藤 康 子

はじめに

近世後期に活躍した福岡の歌人、野村望東尼の紀行文とされる資料に、大東急記念文庫蔵『月瀬紀行』がある。望東尼は、福岡藩士野村新三郎貞實の妻。慶應三年没、六二歳。夫婦で共に大隈言道の門に入り、和歌を学ぶ。『向陵集』<sup>(注1)</sup>『上京日記』<sup>(注2)</sup>『姫島日記』<sup>(注3)</sup>などを著し、また、平野国臣、高杉晋作らとともに、幕末の動乱を駆け抜けた女傑としても知られる。

本書は、『大東急記念文庫書目』の「名家筆跡」の項目に、「江戸末写本、野村望東尼自筆」と記され、『国書総目録』も『月瀬紀行』一軸、著者 野村望東尼、写本、大東急(自筆)と記載され、今日まで『月瀬紀行』は、望東尼の作として扱われてきた。

ところが、大隈言道の歌集『今橋集』<sup>(注4)</sup>(九州大学附属図書館蔵)中の月瀬<sup>(注5)</sup>への旅に関する記述や旅程、そして、言道・望東尼の書簡、その他の資料等から考え合わせると、この『月瀬紀行』に、いくつかの問題点が出てくるのである。よって本稿では、『月瀬紀行』を精査しつつ、言道の『今橋集』と逐一照らし合わせ、比較検討し、『月瀬紀行』と『今橋集』との二つの旅と二つの作品との関係を解明していくことを目的としたい。

一 『月瀬紀行』の紹介と『今橋集』との対比

『月瀬紀行』のあらましは以下の通り。梅盛りの月瀬をめざし、二月二十六日に、友人と二人、大坂を発ち、淀川を遡

り、八幡に宿り、井出の里を経て、高尾、桃が野を通り、月瀬に着く。月瀬の里で、文人なじみの窪田家に滞在し、再び舟にて戻り、三日の朝、中の島に帰り着く。

この『月瀬紀行』と『今橋集』を詳細にみていくと、実は無視できない多くの一致がある。よって、両作品の比較に先立ち、まず両作品の本文を対照して左に掲げた。上段には、

### 月瀬紀行

かねてきこえまゐらせし伊賀の月のせ。つめさかりなるよしきゝ侍りしかば、ともだち三人のうち一人はこゝちあしとてえゆかず、二人して見にゆき侍りてなむ。きさらぎ廿六日、大城のもと京橋のあたりをつちわたるに、はじめて鶯のこゑをきゝて、かひ鳥にやとあやしきやぶのうちを見るに、かへるにはあらでまことうれしくよろこばけり。さて、夫よりよど川の堤はるかにゆくに、四十あまりのむかしはいかゞ見にけむ。こたび見るところ、まことにきよく川はどひろく、水ながれていさぎよし。すべて畿内のさま、山川草木ならかに、川のはとりにさえぎる木もなく、御国のなか川の三ツ四ツもあはせたらんやうなり。ひばりなどのあがるそら、のどかにゆたげなるを、はるかに山こしに山のみねましろにゆきつもりて、これは丹波路の山なるよし。けさ大坂をいでたる船ほをあげてあとより見えたる。筆にはかゝれまじ。

望東尼の『月瀬紀行』の全文翻刻を挙げた。<sup>(注)</sup>下段には、言道が月瀬へ旅した時の歌と詞書部分が『今橋集』中に見出せるので、その月瀬に関する記述の箇所をすべて抽出し、『月瀬紀行』に対応させ、二作品を比べ見ることにする。(句読点、濁点、改行は、稿者による。破れによる判読困難の箇所はとした。『今橋集』には、141・オの如くに丁付けを示した。)

### 今橋集

月の瀬のつめ見。つまのとしむ月廿六日。  
なかせながしといでたつ。京ばしの鶯。  
なか洲のとり、丹波山の春雪、川きよくひるし。

(『今橋集』上 141・ウ)

いがのくになる月せのつめきを、丹林とくもにみにゆく。

(『今橋集』下 179・ウ)

たには路の山の白雪きえかねて吹風さむしよどのかわつら

たごとながらさるけしきなり。なの花などちいさくまだしくて、やふふめるは、御国のさまにことならず。こよひは、やはたどまり也。大休山を二つばかりあはせたる程にて、これ則、男山の御神なりける。神社のいつくしき、いふばかりなく、さいふ、はこぎきも、などがかやうには立さる。やしろのすがた、ならの春日、おほ坂のいく玉神社にたり。神官などの、かりぎぬをきて、夕はらへしたる。篝のさま、えもいはすたふとし。放生川の向へ、さくらのあまたあるところにやどりをかりて、その夜このやはたにやどる。からすのこゑ、山にひときて、とほくきじなどのなき立ほど、この八幡をたちて木津川にかゝる。この川もよど川におとらぬ川幅にて、これまたきよきこといふばかりなく、すのひろきが、いくつともなくて、いまだかゝるすを見しことなし。されどよど川より川水すくなく、あさらなるけしきなり。船も水尾をたどりてゆくやうなれば、あなたにまはり、こなたにたわびて船のつれ立ゆくさま、えもいはすをか。木津川の宿を過て、かもといふところにやどる。このあたりうたあれど、てにさくをいまだえせねばかゝず。

はるくればいつも尋ねて見るつめをことしはづれし月のせにして  
月がせとはいふ人なく 月のせといひて 月がといへば 人きとらぬ  
さまなり。

八幡山一夜やどりてあすの日のくれゆく時や月のせのさと  
かうはよみ侍りしかど、あくる日行つくへき道にはあはれけりけり。さて

文政二年巳のとし、伊勢韓聯玉といふ人、  
筆をとりはじめし、月瀬梅花帖、二川、月  
形などの詩もあり。

(『今橋集』上 143・オ)

八幡の神社。コ、ニトマル。

タ、ミヤ三右衛門。方生川はしぎは。

木津の昼食。か茂の止宿。二七日。

(『今橋集』上 141・ウ)

舟のぼり、下り、右に行、左にたわみ、  
せのあさき、深きにしたがひて、のぼりく  
だるさま、いはんかたなし。山にこそかゝ  
ることはありしとおもひしを、水尾をたど  
りて、船どものあつまり下る、山路のごと  
し。やましろなしま川べにうめあり。

おのづから山と川にあやなして  
梅の姿のめづらしきかな。

(『今橋集』上 142・ウ)

かのかもといふ宿に行つかぬうち、とほく山のすそにいへのかず見えた  
るを、いかなる所かとおもひつるに、こゝぞかの堤の中納言兼輔卿の井  
手のさとはありける。山吹かはづなど、まだしきころなれど、いかゞ  
はさくらん。「山吹の花のさかりに井手にきてこのさと人になりぬへき  
哉」なぞ惠慶もいひしぞかし。中納言こゝにおはしませば、うた枕なる  
みかの原わきてながるゝ水もそなたに見えて、君をはじめ御国人、今爰  
にあらばともくりかへしいひしぞかし。この川をへだてば、南かさぎ、  
北かさぎの山。また宿あり。「南帝のかさぎの寺をいでしより」との給  
へるところ、かなしきことかぎ「り」なし。小山のごときいは、山上に  
いくつともなく、一あしにて、千仞の谷にもまるびおつべきさま、いと  
かしこく、いかでかゝる所に、のがれおはしましけむ。その大岩、さい  
つとの地震に川べにいくつともなくおちてならべるは、いまた苔もお  
ひず。夫よりしるべをとりに行しが、しるべのもの、此ところを限とて  
かへりしが、はじめほどはとかくしてゆきつるを、すゑは道なくなりて、  
たにのふかき事いふばかりもなく、さきへもあとへもえゆかれず。かり  
にも、立てはえあらぬ山なり。されど川ははるかに見えたれば、一人は  
はひ、おのれはいざりて、あしをすなの内にとまらせゆく。わびしさ、  
おそろしさ。道のたがひたるにやあらむ。うし馬などかよふべくもあら  
ず。されど、ひとあしづゝこゝろをなかめて神に願立ばかり。そこをす  
ぎて、高尾といふ所にいたりたるに、梅の花、やゝいづこにもさけるあ  
りて、かなたこなた、こゝは道たひらかにて、さきのけはしきもわすれ

はるくればいつもたづねて見るうめを  
ことしはうれし月のせにして

やはたにやどる

やはた山一夜やとりてあすのひの

くれなむ時や月のせの郷

おもふどちうめみにくれば山鳥の

をやま長引月のせのさと

(『今橋集』下 179・ウ)

柳生

月のせのうめ見にゆけば柳生越

山くづれたる岩のかしこさ

さいつとの地震にて、大岩くづれて道なし。

(『今橋集』下 25・オ)

うめ見るとて、月のせにゆきける時、いたく  
道に迷て。

まよひつゝ杖月のせのあら山を

ふたゝびこゆるいのちともがな

(『今橋集』上 123・ウ)

侍る。すべて花のすがたさくらのごとく、山川にあはせてかたちをなし、うゑたるものとは見えぬ。もとより、むかしこそうゑけめ。とし久しくかなたのまゝなれば老樹もすがたをなして、木　なりたるやうなるは、一木も見えず、枝しげくほそし。夫より桃が野といふところ、人家あり。また夫より月のせむら。三里余も梅さきつゞき、峯、谷、村、川たとへていふには、雲の外にはあらじかし。十五ヶ村の内、月のせ、尾山中にも佳　折人もなければ、水にのぞみてかすしらずさきたるは、いはんかたなし。この船はこゝばかりにて、上下にかよふべき川にはあらず。こゝより、伊賀の上野にかよふ道あるよし。一目千本、万本などは、いかなる人の数もかぞへけむ。山のすがたになれあひたるさま、いまだ詩家の詞に見えはべらす。この月のせの里窪田兵助は、いへなどひろくきよげに、書画などを人に乞てあつめ、扇などに板を彫せて、人のくるをぞまつ。その夜雨やふるとおもひて、あけて見れば、雨にはあらでゆき也。木ごとにつめとはまことかうところにてやよまれけむとも、かへるべやうもあらざれば、またやどりぬ。帰るさは、木津川を船にて九里がほど下り、また九里斗、よど舟にのりて、三日の日のあき、わが中のしまにいたる。をかしからぬうた、いろくさまぐのこと侍れど、そのうちには、道のきをかきて、板にもゑりなむとてそのまゝなれば、くはしきことはその内に可申上候。

廿八日。月の瀬　窪田某魁春洞、カチャ兵助とほくつしのこゑいとほそく、ものはこびたる、はるかにうたごゑさへあはれなり。

うめ見つゝあぐれ行は山鳥の  
尾山長引月がせのさと

そのよ大雪ふれり。いへもいはほもつめにこそ。風景いはんかたなし。あるじのよはひをいはふ。

花こよみみるたび毎におもひてむ  
ちよにかはらぬ梅のゑまひを

なか引

なか引のをおろしにちるうめの花  
なだれて落ちるゆきにぞ在ける

きづより、船にのる。

〔今橋集〕上　142・オ

二日の夜、よどより夜川にて、  
三日の朝、大坂八軒屋につく。

〔今橋集〕上　143・オ

## 二 「月瀬紀行」と『今橋集』の類似点と問題点

『月瀬紀行』と『今橋集』の二作品を照らし合わせると、微妙に類似し、或いは互いに関連していることがわかる。まず、和歌に関してであるが、『月瀬』の「はるくればいつも尋ねて見るうめをことしはうれし月のせにして」は、『今橋』の歌「はるくればいつもたづねて見るうめをことしはうれし月のせにして」と全く一致し、「八幡山一夜やどりてあすの日のくれゆく時や月のせのさと」が「やはた山一夜やどりてあすのひのくれなむ時や月のせの郷」では第四句を「くれなむ時や」と変わるばかりであるので、ほとんど同歌であると言つて良いと思われる。これは、『月瀬紀行』と『今橋集』の作者が、同じであることを示しているのはなからうか。以下、順次文脈を辿りながら、あとづけしていきたい。

『月瀬紀行』（以後『月瀬』と略）の、より、伊賀の月瀬が今まさに梅の盛りだと聞き、仲間三人で行こうとしたが、其の内の一人が行けず、二人で行ったとある。『今橋集』（以後『今橋』と略）では、で、「なかせ」某とともに月瀬に行つたとあり、『今橋集』下の、によれば、「丹林」とも書かれている。

旅の行程は、も、も、京橋あたりをわたり、と、の「よど川」の描写「まことにきよく川はとひろく」と「川きよくひろし」、川から眺める「はるかに山こしに山のみねましるにゆきつもりて、これは丹波路の山なるよし」、  
「たには路の山の春雪」の歌と、「丹波山の春雪」と対応している。ともに、川幅のひろい淀川の、清らかな流れのなか、丹波の山に降り積もっている景色を見ながら進んで行く。しかも、『月瀬』では波線aで「大坂」を、舟で今朝出発したとある。、ともに、方生川の橋の際の八幡に泊まる。『今橋』の波線bによれば、そこは、「タ、ミヤ三右衛門」宅である。も、も水尾をたどり、舟の行き交い、上り下り、左右にたわむ様子のおもしろさを記している。も、も木津を通り、賀茂に止宿する。

また、にも、にも地震の記述があるが、「さいつとしの地震」は「いづれも嘉永七年の近畿大地震のことを指していると思われる。この地震は伊賀地震とも呼ばれ、伊賀では死者が六百人にも達した。月瀬の隣り村である石打村の石打八王神社の棟札には「寅年六月十四日夜七ツ時ヨリ大地震、二十一日迄地震、山崩し、地裂ケ、誠二言語二モ絶シ難ク、後々末代二書印ス也」（月瀬村史）と記されている。そして、でも、でも月瀬に辿りつくのに迷い、苦勞した事は一致して

いる。

月瀬での宿の主は、『月瀬』では「月のせの里 窪田兵助」とあり、『今橋』では「月の瀬 窪田某魁春洞 カチヤ兵助」とある。この「魁春洞」は現存し、別名「カチヤ」あるいは「騎鶴楼」と呼ばれ、江戸時代から続いている唯一の宿屋である。ここには、当時の宿泊者書画帖が現存しており、『今橋』の波線<sup>e</sup>の歌「つめ見つゝあくがれ行ば山鳥の尾山長引月がせのさと」とほぼ同歌が、万葉仮名で「梅見乍 安矩可麗処行 山鳥能 尾山長引 月能瀬乃里」と記され「筑藩 言道」と署名している。(下図)他にも日田出身の広瀬旭荘の書画が言道の和歌の直前にあり、「安政乙卯 孟夏旭荘」とあり、乙卯は、安政二年であるので、その三年後に言道が月瀬を訪れたこととなる。

ただし、現当主、良蔵氏によると、この窪田家は、代々名前に「蔵」をつけるのを常としており、良蔵 幹蔵 輝蔵 隆蔵 岩蔵 兵蔵と遡る。言道の言う「兵助」は「兵蔵」の誤りである可能性が強い。事実、騎鶴楼には「窪田兵蔵」と記された肖像画も残されている。

加えて、これを裏付けるものとして、安政六年に月瀬を訪れた伴林光平が、明治十四年に刊行した『月瀬記行』の奥付に、発兌書林「東京日本橋通一丁目 北畠茂兵衛、西京寺通



『騎鶴楼書画帖』言道和歌

四条上ル 田中治兵衛、大坂心齋橋通北 柳原喜兵衛、尾張名古屋 片野東四郎」等七人に続いて、最後に「大和國添上郡月瀬 鍛冶屋兵藏」の名が記載されているという事実もある。両者はやはり『月瀬』の「窪田兵助」も、『今橋』の「カチャ兵助」も同人物の「窪田兵藏」であり、いずれも同じ箇所においての単純な記憶違いではないだろうか。

ただ、兵藏の前は、他家からの養子で、その前も兵藏であった由。残念ながら今の時点では、どの時点の兵藏であったかは詳らかでなく、今後の調査で解明していきたい。

さて、『月瀬』で、「窪田兵助は、いへなどひろく清げに書画などを人に乞てあつめ、扇などに板を彫せて人のくるをぞまつ。」より推察すると、「兵助（兵藏）」は、かなりの風流人で、多くの文人墨客が集る人気の宿であったことが偲ばれる。

も、も、出発しようとした前夜に大雪が降ったので、もう一泊カチャに滞在している。『今橋』に「そのよ大雪ふれり。いへもいはほもつめにこそ。風景いはんかたなし」と雪と梅とが融和した美しい香世界に酔いしれている。翌日木津川を舟で下り、淀舟に乗り、<sup>②①</sup>により、旅から大坂に戻った日付も符合する。その上、『月瀬』<sup>②①</sup>「三日のあさ、わが中島にいたる」、<sup>②①</sup>「二日の夜、よどより

夜川にて、三日の朝、大坂八軒屋につく。」に關しても、言道は安政四年から中の島に住んでおり、『月瀬』の「わが中島」という点から考えても、『月瀬紀行』の作者は、望東尼ではつじつまが合わず、言道であることは、ほぼまちがいないであろう。

以上より、二者は明かに共通点が多く、旅の行程や、残された和歌もほぼ一致していると見なすことができよう。大東急記念文庫蔵の『月瀬紀行』の作者は、『文庫目録』に記された望東尼ではなく、彼女の和歌の師、言道であることは明らかであろう。

### 三 旅の目的

さて、そう考えた時、二作品は、言道の月瀬への旅を互いに補い合う好資料と言えよう。次に、このことを踏まえて、この月瀬への旅の目的はいかなるものであったかということを考えていきたい。

『今橋』の、「文政二年巳卯のとし、伊勢韓聯玉といふ人筆をとりはじめし、月瀬梅花帖、二川、月形などの詩もあり」とある様に、韓聯玉こと山口凹巷の『月瀬梅花帖』（中野三敏先生蔵）に、二川相近、月形質等が詩を寄せている。二川

相近は言道の若き日の師であり、月形質は、鷗窠と称し、黒田藩の漢学者であることから、言道はこの『月瀬梅花帖』に影響を受けて思い立った旅であることが想定される。

斎藤拙堂が文政十三年にこの地に来遊し、『月瀬記勝』を著し、嘉永五年に刊行され、一躍月瀬梅林が広く世間に広まったことは、良く知られている。しかし、言道の場合は、むしろ、それより十年以上前の文政三年の月瀬来遊し文政八年刊行されたこの『月瀬梅花帖』に触発された旅であったことが注目される。

よって、『月瀬』の「四十ばかりむかしはいかゞ見にけむ」は、『月瀬』の出発が、『今橋』から補える様に、安政五年で、それから四十年前というところ、ちょうど『月瀬梅花帖』の韓聯玉が文政三年に月瀬を訪れた事実とほぼ一致する。

ただ、ここで問題点がひとつある。いままで述べてきた様に、『月瀬』と『今橋』を同じ言道の旅とするならば、当然ながら出発の年月日も同じであるはずだが、『月瀬』では「きさむき廿六日」「今橋」では「つまのとしむ月廿六日」に旅立っている。「きさむき」と「むつき」で、一月のずれがある。

この点について、望東尼の『向稜集』（福岡市博物館蔵）によると、望東尼は万延元年の梅の頃、言道から次のような

手紙を受け取った事実が記されている。

万延元年庚申のとしのはる……

言道翁が月せの梅見に行しよしいひおこしける文の中に

かしこの山ざとのさまかきたる糸をいれておこせられしを見て

いのちをも月のせ川にうちいれて

見まくほしきはちよろづのつめ

此条の中に酒屋の軒端梅林の中に見えたれば

つきせのうめのこのまにこがくれて

さけつるいへの軒も見ゆなり

万延元年というと、言道の月瀬の旅のちょうど二年後のことである。波線⑦より、言道が月瀬を旅したときの様子を思い出して、二年後にたよりにしたことがわかる。しかも、波線①、②より、たよりに、絵まで添えられていたとある。言道がこのとき望東尼に書き送ったその書簡が、『月瀬』と関連があるのではないか。そして、其の後、何らかの形で、大東急記念文庫に入り、そのまま望東尼著、自筆の紀行文とされたとも考えられる。というのも、『月瀬』の末文、波線g

「くはしき」とはその内に可申上候」と手紙文の形態の名残があるからだ。

出発の月のずれは、どちらかの筆録の間違いか、言道が望東尼に手紙を書いた時点での日時<sup>④</sup>の記憶違いか。実際の月瀬への旅から、既に二年が経過した後の手紙であるので、多少なりともその可能性は在ると思われる。

ただ、望東尼も、この手紙を受けとったその又二年後に、自分もぜひ月瀬の美しい香世界に遊びたいと、実際に月瀬を訪れている。それは、望東尼の筑紫いそ子宛書簡から伺える。

(句読点、濁点は、稿者による)

(前略) 明日より月の瀬にと思ひ立ち侍るまゝ、留守のうち<sup>⑤</sup>に御使もやあらんと、あらく書いはべるになん。

ゐなの笹原といふところの、池のほとりに、茶店あまたありて、人むれゐて酒飲みたりしかば

都びと春はつどひてくみかはすさゝのはやしのみな  
のさゝ原

なぐちくすさびけん。この春は不快にて、藪ぬしにありしうちより、かしこの初ひなの細工の手つたひ、先生やくして、やうくきのふ三日すぐして、今日はひまと思ふに、月の瀬に行くといそがはし。(中略) この春は

かり歌よまぬ年今までなし。

人にたゞまかれく／＼てゆく水のすまぬころをあは  
れとも見よ

三月四日

望東

いそこの君 御もとに

右の書簡は、文久二年三月四日のもので、波線⑤「明日より月の瀬にと思ひ立ち侍る」、波線④「月の瀬に行くといそがはし」とある。これは、望東尼は、文久二年三月五日に月瀬へと旅立っていることを示す。師の言道が安政四年に大坂に、『草径集』上梓を目的に上坂し、安政五年に月瀬へ旅立つ。望東尼の『上京日記』によると、望東尼は、わざわざ大坂中の島の言道に会つために、文久元年十一月二十四日に上坂する。そして、言道の紹介で、歌会に参加させてもらったり、多くの文人を紹介してもらい、十二月二日には、言道の薦めもあり京都へ旅立つ。ここでは、太田垣蓮月や、千草有文などと交流を深め、翌年の文久二年三月五日、右の手紙の如くに、月の瀬へ旅だっているのである。つまり、大坂から京都へまわり、その足で月の瀬に寄つたわけであるので、『月瀬』とは、日程も、旅のルートも異なることがわかる。さて、次に、『月瀬』の波線c「つたあれどてにさくもい

まだえせねばかゝず」や、波線「」をかしからぬつた、いろくさまぐのこと侍れど、そのうちには、道のきをかまて板にも糸りなむとてそのまゝなれば、くはしきことはその内に可申上候」ということに注目したい。これを、言道の思いとして受け取ると、言道には紀行文を書き、出版したいという目的があつたことを知ることができる。和歌においては十萬首以上の作品があると推定されている言道ではあるが、彼には今まで紀行文がないとされてきた。しかし、大東急『月瀬紀行』は、現存するはじめての紀行文、あるいは紀行文の草稿となる。『草径集』といった歌集だけでなく、紀行文の上梓にも意欲を燃やしていたであろうことを、言道資料の中においてはじめて伺つ事ができたといえる。

実は、言道は弟子達には、紀行文を書き留める事を推奨していた。言道の弟子小林重治の『豊後の道の記』（桑原廉靖氏蔵）の序に言道は次のように述べている。

ことしやよひのころ、小林重治、ふごのかむなわのゆあびにとてゆきけるを、かの湯あみにもあらず。かしの海山、いとおかしくふるきところなれば、しるせることく、いかばかりおもしろかりけると、ことさらにうたまためでたくなむ。おのれいまだかのくにすこしもいたら

で、つばらにもしらねど、なか／＼みやびたる人どもすめりとぞ。（中略）この記を見れば、いとねもころにきたらひかはして、しむしちなるひとなりける。おのれいまださのみも老ねば、かならずそのちかき程に、かのくに／＼もいたりて、かの人ら、はためづらしきうみ山、古めきたるさ／＼をもたどるへし。すべてかゝる紀行、ありのまゝにするしおけば、年へて、とりいでたる時、おもしろくなつかしくて、いまそこにいたれるこゝちするわざなれば、いづこにゆくにも、かくしるしおくべきことなむありける。

右の『豊後の道の記』は、重治が嘉永五年の三月七日から四月三日までの間に、飯塚を出発して、耶馬溪を通り、別府の鉄輪温泉へ旅した時のことを紀行文にしたもので、そこに言道が序をよせたものである。波線①「おのれいまだかのくにすこしもいたらで、つばらにもしらねど」と、述べて、波線②の様に、旅に出たならば、その記録や体験を、積極的に紀行文に残す事を薦めている言道のことはを確認する事ができる。その言葉の裏には、弟子への励ましといった意味合いだけでなく、自分自身へのメッセージがあつたと思われる。しかしながら、歌づくりにおいても、波線③「このあたりう

たあれど、てにさくをいまだえせねばかゝず」の様に、添削に添削をかさね、作品へのこだわりが在る言道にとつて、大變慎重に紀行文を用意しようとしていたであろうことが推測される。

### 終りに

今回、大東急記念文庫蔵『月瀨紀行』の作者は、今まで言われてきたところの望東尼ではなく、『今橋集』の作者と同じ大隈言道ではなからうか、という問題提起のもとに、『月瀨紀行』と『今橋集』とを、比較検討し、言道書簡や、望東尼書簡、望東尼の『向稜集』や、『上京日記』等から総合的に判断して、言道が作者であるとする私の判断は、ほぼまちがいないであろうことを確認した。そして、二作品は、同一の作者による、同一の旅を題材にしている事が明らかになった。

このことにより、『今橋集』の月瀨の旅を大きく補う作品として、『月瀨紀行』は大變有効であるとともに、歌集の歌の一部や短い詞書が、次々と膨らみ、紀行文へと繋がっている言道の執筆過程を伺いみる一助にもなり、言道研究に於いて、新たな前進をなしたと思われる。そして、これを出版したいといった、明確な自己表現を、言道資料の中では、はじ

めてここに見出すことができた。『草径集』の出版に際して、約千首の歌の版下をすべて自らの手で書いた言道である。

『月瀨紀行』に關しても、同じ思いであつた事だろう。

### 注

- (1) 天保三年、言道に入門したころの「言道大人をわがうたの師とたのみし時」にはじまり、三四年間にわたる望東尼の歌集。文久三年の言道の序をのせる。
- (2) 上阪した言道や、京の太田垣蓮月、千種有文らを尋ねるべく、文久元年福岡を発ち、文久二年一月までの旅程を記した日記。
- (3) 慶應元年、乙丑の変に連座して、閉門謹慎の身となり、玄界灘の孤島姫島に幽囚された。そのころ書いた『夢かぞへ』に続き、慶應二年三月まで書かれた日記。
- (4) 言道自筆歌集『今橋集』上下に分かれる。安政三年ころから万延元年ころまでの歌集。
- (5) 現在の奈良県添上郡月ヶ瀬村。
- (6) 『月瀨紀行』の翻刻に際し、ここに書誌を記す。

底本 大東急記念文庫蔵本 写本一卷

形態 卷子本 縦一七・五糎 横二二〇・六糎、本紙

縦一五・四糎 横一七五・六糎 四枚張り合わせ

(第一紙五五・四糎、第二紙五五・四糎、第三紙五五・六糎、第四紙九・二糎)

用紙 楮紙 白色

外題 金箔貼外題簽に墨書外題「野村望東尼 月瀨紀行」

本文別筆、後人の後補

内題 なし

箱書 久原文庫製香色紙製帙箱に墨書題簽「野村望東尼

月瀬紀行」本文別筆、後人の後補

(昭和二十三年、久原文庫一括購入した際に入庫。)

(7) 『今橋集』の波線eの歌では「月がせ」、騎鶴樓の宿泊者書画帖では、「月のせ」となっている点においては、『月瀬紀行』の波線dに「月がせといふ人なく、月のせといひて、月がといへば、人きゝとらぬさまなり」とある。当時、月瀬の人々は「つきせ」と呼んでいたことがわかる。言道は、現地で歌を記した時は「つきせ」としたが、後に『今橋集』では、一般的に言い慣れた「つきがせ」と詠んだり、「つきせ」と詠んだりもしている。

(8) 『月瀬梅花帖』中の「遊月瀬記」に次の様にある。

文政三年五瀬韓拗巷先生遊和州訪月瀬梅花而帰藤君長年之西傳勝事説得甚詳余傾聽殆同一傷甘夢已而一夕遇春月到窓稿恍然流想乃援梅槽轉軸度風香調卒占一篇以奉呈

二川相近

月瀬梅花百里新、韓家彩筆与成春、唯聞其勝無由到、一微風香遠思人

凹巷韓詞宗州名家(中略)亦得詠月瀬梅花數十絶雅致妙辞令人傾慕益深也乃不斬老拙曼賦此以寄呈情見乎辞

月形質

賞詠梅花不肯休、期令四海弟兄酬、横斜已厭西湖什、沿遡新占月瀬船、幽韻清漂虚夢寢、曲残信讖幾春秋、何当飛入東風去、千里播芳思水流、思川在太宰府

(9) 『月瀬梅花帖』以前にも、神沢杜口の写本『おきなぐさ』や、

堀末塵の『梅花帖』、岸勝明の『月瀬梅花詩集』など幾つか挙げられるが、言道の目に触れたかどうかは定かではない。いづれにしろ、凹巷、拙堂以降も数々の月瀬に関する出版物が出ており、言道の心を月瀬へと駆り立てたものと思われる。

【付記】本稿は、平成十三年六月の九州大学国語国文学会における口頭発表の一部に基づく。学会発表の席上、またその前後に御教示・御指導を賜った諸氏、特に資料閲覧にあたり御高配を辱けなくした中野三敏先生、月瀬村騎鶴樓窪田良蔵氏、月瀬村教育委員会村部全亮氏、桑原廉靖氏、清水和弘氏に、記して深甚の謝意を表す。また今回の翻印については、大東急記念文庫の岡崎久司氏に便宜をはかって戴いた。合わせて篤く御礼申し上げます。

(しんどう やすこ・本学大学院博士後期課程)